

## 館林キリスト教会 デボーションノート（2008年）

1月 1日 今日の通読箇所 エズラ記 2章59～70

「身分証明」

それでも例外はあるもので、祭司の血統でありながら、系図を失ったため身分の証明がなく、登録のできない人たちもいた。このことを「天国民の身分」ということに置き直して考えてみれば、我々に対する一つの教訓である。新約聖書の中にも「いのちの書」に名前が記されるとか、消されるとか「私たちの国籍は天国にある」というような表現も多いのである。またバビロン捕囚期のユダヤ人は、捕虜とは言っても、長くそこで生活する間には、だんだん信用を獲得して、一般市民のように生活し、次第に持ち前の能力を発揮して、相当な地位や富を持つようになってきたことは、ゼルバベルその他の人物や、多額の神殿建築の献金などにもうかがわれる。中にはダニエルのように、宰相の地位までのぼった人もあるくらいだった。

1月 2日 今日の通読箇所 エズラ記 3章

「神殿再建」

彼らは荒廃していた故国を整頓して生活再建に努力したが、その方に少し目鼻が付いてくると、すぐに祭司制度を組織し、祭壇を建て、燔祭をささげ、礼拝を開始した。また神殿再建の準備に入り、翌年の2月には起工式を行ったと言えば、いかに神殿と礼拝がこの民族にとって中心であったか、ということが察しられるのである。この時、人々の賛美の声、喜びの声、それに泣き声と一緒に、そのどよめきは遠方まで聞こえた。少数の老人の中には、もとの神殿とその滅亡を目撃した人もいたから、長い苦難を耐え忍んで来たあげく、神の恵みによって今この盛儀に会い、泣かざらんとするもあたわず、という心境だったろう。

1月 3日 今日の通読箇所 エズラ記 4章1～7

「妨害行為」

一度滅亡したユダ王国が、今度ペルシャ王クロスの命令と保護のもとに、再び国を建てる気運になってきたことは、周囲の異邦民族にとって脅威となった。なぜなら、昔、ダビデ・ソロモンの時代、イスラエル・ユダ王国は、この地方の強大国として、周囲の諸民族を威圧していた。また滅亡後も、バビロン・ペルシャにおいて、次第に地位を占め、その民族の優秀性が明らかであるのは今まで学んできたとおりであるからである。しかも、サマリヤ（昔の北イスラエ

ル王国)に住んでいる異邦人は、アッシリヤによってこの国が攻め滅ぼされたのち、そのアッシリヤの殖民によって住み着いた連中だから、彼らにユダ王国の復興が脅威に感じられたのも無理はない。それでも彼らは、最初は、表面協調的な態度を装って、友好協力を申し出た。ゼルバベルがこれを拒絶すると、今度はあらゆる手段で妨害をはじめ、手段がつきると、ペルシャ王に直接、工事中止命令を訴え出るといふ有様であった。

1月 4日 今日の通読箇所 エズラ記 4章17～24

「訴訟」

周囲の異邦民族がペルシャ王に対して訴えた内容は「ユダヤは昔は強大な国であって、しかもいつも政治的駆け引きや裏切りが多かった。アッシリヤ、バビロンともよくよく手を焼いた結果、とうとうこの国を攻め滅ぼしたのだ。それは古い記録を調べてみればすぐにわかることだ。今、再び彼らに国を建てさせるのは、きわめて危険だから、十分調査の上、工事中止を命じて欲しい」というものだった。この訴えは一応効果があって、神殿再建工事は中止を命じられたのである。すでに許された罪を数え上げ、訴え続けて、クリスチャンの良心を脅かし、健全で安定した信仰生活を損なおうというのは悪魔の常套手段だ。注意しなければならない。

1月 5日 今日の通読箇所 エズラ記 5章1～17

「工事強行」

神殿再建工事中止が長引くので、預言者ハガイ、ゼカリヤらは立ち上がって人々を励ましたので、とうとう工事を強行再開することになった。(この二人の預言者のメッセージを記録、編集したのが、ハガイ書、ゼカリヤ書である。)するとまた早速、反対の人々の訴訟が始まり、ユダヤ人のこれに対する反対訴訟も起こされる。記録を調べれば、昔のイスラエル、ユダの旧悪は歴然としている。しかしそれにもかかわらず、本当にクロス王は彼らを許して、国の再建を認めたのか。ユダヤ人は、旧悪の記録だけでなく、クロス王の許しの記録、ユダヤ再建命令の記録もあるはずだと主張する。果たしてその記録があるか？これが訴訟の争点である。

1月 6日 今日の通読箇所 エズラ記 6章1～15

「神殿再建工事完成」

ペルシャ王ダリヨス(すでにクロス王から代が替わっている)の調査の結果、ユダヤ人の主張が通り、クロス王の詔勅のコピーが発見された。そこで各地方長官らは、ユダヤ人の建国を援助すべきこと、妨害は排除すべきことなどが、

再び命じられ、かくて着工以来30年にして、第2神殿は完成した。これらのいきさつをクリスチャンに当てはめて考えれば、同じように、我々の過去の罪ははっきりである。しかし、クロス王ならぬキリストによる罪の許しは、もっとはっきりである。我々はペルシャ王の詔勅以上のキリストのみことばの約束に堅く立って、信仰生活とご奉仕の建設に前進しよう。

1月 7日 今日の通読箇所 エズラ記 7章7～26

「第2回帰国」

クロス王の詔勅による第1回帰国から、約80年たって、今度アルタシャスタ王の7年、すなわちBC458年に、再び大量のユダヤ人が帰国することになった。この時のリーダー、エズラは、有名な聖書学者であったが、それだけでなく、アルタシャスタ王の好意から、公式には「ペルシャの地方官」の地位と権限を与えられた。すなわち「ユダヤ及び近国の視察、同じ地方の裁判権、神殿工事その他ユダヤ建国の指導援助」など、種々の権限と資格を持って主張することとなった。

1月 8日 今日の通読箇所 エズラ記 8章21～34

「断食と祈り」

エズラは出発にのぞんで、アハワ河に人々を結集し、人員の調査や、なかなか多い金銀や貴重品の計量、資材の梱包などを行った。その結果、レビ人の数が足りないので、レビ人の帰国者の追加募集などもあった。そして何よりも人々は、エズラの指導のもとに断食し、熱心に祈ったのである。彼らはこれだけの旅に出るのに王様に、道中の護衛のための、軍兵を派遣してもらうことなど、求めなかった。それは、ただでさえ脅威を感じ、嫉妬、敵対、妨害の気持ちをぬぐいきれないでいる、周囲の小民族を刺激したくなかったし、何よりも「神様が我々を守ってくださる」という信仰を、あきらかに証ししたかったからであった。

1月 9日 今日の通読箇所 エズラ記 9章1～15

「茫然自失」

さてエズラたち本国帰還者の一行がユダヤに到着してみると、この80年の間に、またしてもユダヤ人の信仰と道徳が低下し、周囲の異邦人との間に、かなり自由な結婚などが行われていた。すべてつかさたちの報告によって分かったのだが、これは当然、異邦人との、偶像礼拝や不道徳な生活の、妥協やお付き合いの結果であることは明らかであった。こういう世の有様を悲しむ人々もいて、今エズラのところに集まって来た。エズラは驚き悲しんで、しばらくは茫

然自失の態であったが、やがて断食と祈りに入った。その悲痛な祈りが、ここに記されているのである。

1月10日 今日に通読箇所 エズラ記 10章1～17

「人々のきよめ」

やがて国民の間に良心の覚醒が始まった。今の状態を悲しむ人々がいたことはまだしも幸いであった。エズラと那些人々の祈りと、働きかけが、ユダヤ人たちの良心に光を与えたのであった。彼らは定められた日にエルサレムに集まって来た。エズラは神様に励まされながら、彼らの指導に当たった。彼らは砕かれて悔い改めた。丁度大雨の季節で、集まった人々は、恐怖と後悔と悲しみと、ずぶ濡れの寒さで震えていた。それから、明確な宗教改革と肅正が行われた。罪を犯したものは調査の上、身辺と家庭の、きよめと整理を行わねばならなかった。祭司であろうと、長老であろうと、容赦はしなかったのである。

1月11日 今日に通読箇所 ネヘミヤ記 1章1～11

「エルサレムの荒廃」

ネヘミヤ記の物語は、エズラに導かれて帰国したユダヤ人によって、エルサレムに再び神殿が建てられてから、約95年後に始まる。ネヘミヤはペルシャの王宮で、王の侍従長という要職にあった。90年前、せつかく帰国して故国に住むようになったユダヤ人も、またせつかく再建されたエルサレムの神殿も、城壁のない無防備のありさまで、かつ行政的には、無責任という以上に、反ユダヤ的傾向の強い、サマリヤの管轄下に編入されていたらしく、しばしば異民族の攻撃略奪を受けた為、今は恥辱と荒廃のうちにあった。ネヘミヤは常々これらの報告を耳にし、心を痛めていたが、ついに放置できない限界に来ていることを悟り、今真剣に祈り始めたのである。

1月12日 今日に通読箇所 ネヘミヤ記 2章1～10

「出発」

憂い心になれば、色おのずから面に出る。ネヘミヤの憂色はついに王の目に止まった。アルタシャスタ王と、王妃とネヘミヤとの間には、ただの君臣以上の友情が通っていたらしい。ネヘミヤの希望を聞くと王は、ネヘミヤが必要とする期間を確かめ、ネヘミヤのユダヤ出張を許してくれた。しかもペルシャの任命を受けたユダヤ総督という資格で、関係地方の知事たちに対しては「ネヘミヤの通行を保護し、便宜をはかるように」またユダヤ周辺地方の知事に対しては「資材の供給その他の協力をもって、ネヘミヤの事業を助けるように」との親書を与えられた。しかも軍隊さえも共に派遣したのであった。ネヘミヤは言っ

ている。「これらは、神がよく私を助けられたからだ」

1月13日 今日の通読箇所 ネヘミヤ記 2章11～20

「視察」

さてエルサレムに到着すると、ネヘミヤは早速、エルサレム荒廃の様子を視察した。彼がわざわざ夜を選び、少数の伴を連れ、幾分か秘密行動を取ったのは、妨害を避けるためであった。しかしそれと共に、人まかせの報告などでなく、自分の眼で確かめ、また静かに主と共に見、主と共に思い、祈りつつ観察しなかったのであろう。このように、誰にとっても、どんな事業にとっても、観察、考慮、研究は大切だ。しかも、いつも祈りつつ、主と共にそれをなすことが必要だ。主は常に困難、絶望から我々の心を守り、知恵と確信と力を与えてくださるからである。

1月14日 今日の通読箇所 ネヘミヤ記 章3章1～14

「工事開始」

ネヘミヤは、エルサレム城壁再建工事に際して、国民総動員で工事に当ること、責任の分担、仕事の分業などを、根本方針とした。またこれに対する、人々の服従と協力はすばらしかった。たとえば宗教家である祭司達、役人であるエルサレムの知事たちとその一族、金細工や製香などの技術者や職人たちが、なれない手に道具を持って、本職の指図を受けながら、汗まみれになって働いた。区域外の遠方の人々も応援し、人手の少ない家族では、娘たちまで工事に参加したことが記されている。まことにめざましく、けなげな有様で、これは今日の教会の奉仕の模範である。しかし中には、テコアの貴人たちのように、これ程の事業にさえ参加しない人たちのことも記されているのだ。

1月15日 今日の通読箇所 ネヘミヤ記 4章1～14

「妨害工作」

周囲の民族は、ネヘミヤの指導のもとに、エルサレム城壁が再建されようとするのを見ると、嫉妬、不安、怒りに駆られた。最初はあざけり、ケチをつけ、イスラエルの人々のやる気をなくさせようとして「あんな城壁は、狐が一匹のぼっても崩れるさ」などと言っていた。しかるに工事が着々と進み、城壁が予定の高さの半分ぐらいまで行くと、彼らもあわてた。そこで作業員を放って、ユダヤの人々に混乱を生じさせ、その一致を妨害しようとした。そのせいか、あまりの難工事と資材、労働条件の不備に不平を言う者も出て来るし、紛れ込んだ敵の作業員に殺されるとか、奴らが攻めて来る相だ、とかの流言におびえる者もいる。その時ネヘミヤは言った。「彼らを恐れてはならない。ただ大いな

る主を恐れ、依り頼みなさい。自分の家と家族のために戦うのだ」と。

1月16日 今日に通読箇所 ネヘミヤ記 4章15～23

「突貫工事」

いよいよ昼夜交替の突貫工事となった。それだけでなく、敵の不意の攻撃も予想されるので、現場には工事をする人々のほか、武装兵と指揮者を配置することにした。またラッパの合図と共に、すぐ兵士が場所に集れるようにした。本当に人々は「片手で工事をなし、片手には武器を取った」という有様だったのである。ネヘミヤ、その一族、その護衛兵などは、夜も武装を解いて休むことがなかった、と記してある。本当に彼らの姿は、今、教会というエルサレムを建てようとする我々クリスチャンの励みだ。

1月17日 今日に通読箇所 ネヘミヤ記 5章1～19

「生活問題」

この間、人々の生活も大きな問題だった。この国民的大工事の間に、人々の生活は苦しくなって来た。それも全部の人が同じように貧乏になり、同じように欠乏に耐えるのなら我慢もしやすい。ところが実際は、貧しい人が心ならずも食物を借りると、貸す方ではいつものとおり、抵当を要求し、利子を取る。結果的にはこのドサクサの中で、結構もうける人が出はじめたので不平が出た。さて改めて調査してみると、ネヘミヤ自身の貸しについても事務員たちの手で、通例どおり計算によって、利子が取られていたのである。普段だったらこれは事務的な計算で、別に悪事ではない。ネヘミヤは言う。「これは自分の兄弟同胞を売るようなものだ。勿論私の利子も、すぐ事務員に命じて止めさせる。諸君もこの際、お互いの間で利子を取るのを止めなさい」人々は素直に、このネヘミヤの勧告に従った。実はネヘミヤは、ユダヤ総督としての就任期間の12年間、総督の報酬を受け取らなかった。否、総督の役所の維持、官吏役人の生活費、多くの役職の人々の会議や接待など、莫大な費用は、すべていわゆる自腹を切っていたのである。恐らく誰の目にも明らかな、このネヘミヤの無欲、清廉が、この時の発言の強い説得力、影響力となったに違いない。

1月18日 今日に通読箇所 ネヘミヤ記 6章1～14

「悪巧み」

敵は、城壁工事が進み、門扉（もんび）を設置するところまで行ったのを見て、妥協の相談に見せかけて、某所でネヘミヤと会見しようと申し入れて来た。ネヘミヤは答えて言った。「どうしてこの大いなる工事を差し置いて行き、その間工事を中断できるでしょう」と。これは恐らくネヘミヤ暗殺がねらいであっ

て、ネヘミヤの拒否にもかかわらず、この提案はしつこく、4、5回もくり返された。とうとう「ネヘミヤとユダヤ人の、ペルシャに対する反乱、謀反の噂が広がっている。我々と相談しないと、ペルシャ王の嫌疑を受けて、大変なことになるぞ」とおどかすに至った。またあるユダヤ人は「あなたは命をねらわれて危険だから、しばらく神殿にかくれよう」とすすめた。これはネヘミヤに、宗教上の禁を犯させて人々の信用を失墜させようとの悪巧みで、この男は敵に買収されていたのだ。同じように、買収されて敵の手先になった人の事を、ネヘミヤはほかにも挙げている。この間ネヘミヤが守られたのは「あなたがたが善に熱心であれば、だれがあなたがたに危害を加えようか（第1ペテロ3章13）」というお言葉のとおりであったと思う。

1月19日 今日に通読箇所 ネヘミヤ記 6章15～7章4  
「工事の完成」

いよいよ城壁は完成した。今まで妨害して来た異邦人もこれを見ると「恐れ、また面目を失い、神の助けのすばらしさをみな悟った」のであった。しかしまだエルサレムの住民は少数で、家も少なく、依然反対と策謀を続ける異邦人にかこまれた孤立の状態で、しかもイスラエル内部にさえ内応者、裏切り者の心配があつて、まだまだ油断はできなかつたのである。夜は城門をきびしく閉ざし、番兵を立てるなど、城壁建築中と同じように、全住民総がかりで部署を定め、警戒に当つたのであった。

1月20日 今日に通読箇所 ネヘミヤ記 8章1～8  
「特別礼拝」

エルサレム城壁の建築は何のためか？主の民が住むためである。故に城壁建築完成の記事に、7章以下の住民数調査の記事がつづいている。神殿再建は何のためか？主の民が礼拝を守るためである。故にここにエズラの指導のもとに行なわれた、特別礼拝の記事がある。礼拝は聖書朗読が中心であつた。聖書が開かれると、人々は起立して「アーメン」と言った。エズラを始めとする指導者たちは「聖書を明瞭に読み、その意味を解き明かして、人々に悟らせた」のであつた。

1月21日 今日に通読箇所 ネヘミヤ記 8章9～18  
「感動の涙」

この礼拝において人々は泣いた。罪の深刻な自覚と悔い改めのためであろう。エズラは「いつまでも泣いていてはいけない。信仰と感謝をもって主の恵みをうけ入れ、共に喜ぼう」とすすめた。その時感謝と喜びも、また涙であつたら

う。そしてそのあとに、聖書の定めに従って「仮庵の祭り」が行われ、人々の喜びは更に大きかったのである。ここに記された「主を喜ぶことはあなたがたの力です」というみ言葉を記憶したい。これは今の我々にとっても、信仰生活の秘訣であることに変わらない。

1月22日 今日に通読箇所 ネヘミヤ記 9章1～15

「エズラ先生の祈り」

ここに人々が6時間聖書を学び、つづいて6時間祈ったと記されてあるのを見れば、その精励が思いやられるのである。とても「水上聖会」どころの話ではない。そして彼らの祈りは、いつか個人の祈り、今の問題の祈りから進んで、次第に「なぜ我々の先祖の時代に神の祝福を失い、国が滅びるような事態を招いたのか？」そのことを考え研究し、かつ反省し、再びそんな事にならないように、自粛し自戒してさらに熱心に祈るようになった。以下に記されたエズラの長い祈りもまた、今でも我々の祈りの模範である。

1月23日 今日に通読箇所 ネヘミヤ記 9章16～25

「あわれみ深き神」

エズラの祈りは、聖書に記された先祖たちの悲しむべき行為とその裁きと、神のあわれみの歴史を、そのまま神に申し上げているようだ。これが同時にエズラたちの悔い改めであり、また神の恵みに対する感謝なのだ。先祖たちは出エジプト以来、たびたび神にそむいた。カデシバルネヤでも、金の子牛事件の時でも。しかるに神はその罪をゆるし、一方的に神の約束を実行して、荒涼たる砂漠の旅行中にも、彼らを導き、必要を供給し、勝利を与え、やがて乳と蜜の流れる約束の地に彼らを導き、そしてそこを占領させて下さったのだった。

1月24日 今日に通読箇所 ネヘミヤ記 9章26～31

「反逆と忍耐」

くりかえし行われたイスラエルの反逆について、エズラは祈りの中で様々な形容の言葉を用いている。その時「彼らは、肩をそびやかした」「高慢でかたくなになった」「神のおきてを破った」「神の言葉を後に投げ捨てた」「預言者の言葉に耳を傾けなかった」これらは言わば、霊的な病人の病状書だ。しかしそれは決して昔のイスラエルだけのことではない。我々の心の中にそのいくつかがあれば、警戒が必要である。これらは癌、心臓病の症状より、もっと危険なのだ。

1月25日 今日の通読箇所 ネヘミヤ記 9章32～38

「奴隷の民」

バビロンに補囚となったユダヤ人は、ペルシャ時代にだいぶ帰国することが出来たものの、そのころから今に至るまで、いわゆる「ディアスポラ」と呼ばれて、国外に離散移住をつづけるユダヤ人は多かった。「イスラエル共和国」建国後の今日でも、その人口の5分の4は外国に住んでいる。また本国に住むユダヤ人といえども、昔からいつも強力な国の支配のもとにあつて、民族的には「奴隷状態」だった。イスラエル民族と、その国家の真の復活、回復こそ、先祖代々のユダヤ人の悲願だ。いま、主のしもべであると共に、同胞愛、愛国心にみちたエズラもまた、このために祈っているのである。

1月26日 今日の通読箇所 ネヘミヤ記 10章28～39

「神との契約」

前章の終わりでも見てきたように、再び先祖のような罪を犯して神の裁きを受け、国を滅亡に導くことがないようにとは人々の堅い決意だった。この決意を人々は神の前の堅い契約にあらわした。そして代表としてレビ人たちと祭司たちがこの契約に捺印した。次に契約の内容が記されている。異邦人との交際に一線を引いて、絶対に異邦人との結婚関係などに入らないこと。安息日と礼拝をきちんと守ること。神殿や祭司を維持するための負担、献金は、必ず実行し、決してなおざりにしないこと、などが定められている。

1月27日 今日の通読箇所 ネヘミヤ記 11章1～14

「エルサレム居住」

指導者たちは勿論エルサレムに住むが、その他の国民の中からも、エルサレムに住む人々の割合を定め、くじ引きでそれを義務づけ、また自発的にエルサレム居住を申し出た者が賞賛されているのは面白い。恐らくエルサレム居住者は神殿、城壁城門の警護、その他の義務負担が多く、逆に農業など収益をあげるには不便であるほか、この町はなんとなく窮屈で、しかも敵の攻撃の危険も多かったから、あえてこの町に住もうというのは、とにかく忠実で勇敢な人たちだったのだ。

1月28日 今日の通読箇所 ネヘミヤ記 12章27～40

「感謝会」

ネヘミヤ記 は一口で言えば、エルサレムの城壁再築の記録である。今までに彼らの出会った困難と、その克服の記事を読んで来た者にとっては、この落成感謝式の喜びも察せられるのである。 彼らは2組の行列を作り、それぞれ反対

の方角から出発し、賛美しつつ、城壁の上をまわった。積まれた石のひとつひとつさえ、辛苦の思い出のこもらぬものはない。やがて行列は合流して神殿の感謝礼拝にのぞんだが、その喜びの声は近隣の地方にまで聞こえた。

1月29日 今日に通読箇所 ネヘミヤ記 12章40～47

「喜びの声」

ここに「彼らはその日、大いなる犠牲をささげて喜んだ」とある。これはこの日の感謝礼拝で献げた犠牲が多かったことを言うのは勿論であるが、しかし実は神殿の再建も、城壁の再築も、人々が主のために喜んで捧げた犠牲にほかならない。人々はそれらの犠牲が神様のために役立ったのを見て喜びの声を上げたのだ。これは今も、主に献げ主に仕える者の共通して抱く喜びなのだ。どうか教会においても、献げる喜び犠牲の喜びが、遠くまで聞こえるようになってほしい。

1月30日 今日に通読箇所 ネヘミヤ記 13章1～14

「ルーズの罪」

ネヘミヤはユダヤでの仕事が一段落した機会に、一時バビロンに帰国していたが、その留守中のことである。神殿の部屋を管理する責任者のエリアシブがその特権を利用して、有力者である異邦人、自分の義父トビヤの為に、多分宿泊の目的で神殿内に一室を設けて便宜を計った。エリアシブは異邦人と結婚していたから、これは二重の罪だった。またそのころ、祭司その他の神殿奉仕者に、必要品が供与されなかったため、彼らが奉仕に専念することが不可能になっていた。暫く留守にしたネヘミヤは帰任してこの事情を知ると、テキパキと処理してこれらのルーズを改めたのであった。我々もルーズを警戒せよ。

1月31日 今日に通読箇所 ネヘミヤ記 13章15～30

「ルーズときよめ」

誰でも安息日に仕事や商売を休まなければ、礼拝が守れるはずがない。また神の民でありながら異邦人と結婚し、家庭生活も子供たちの教育も、異教と半々ということでは、家庭における神の祝福もおぼつかない。これらも同じく信仰生活のルーズである。ネヘミヤはそのルーズを正した。ここにネヘミヤは「彼らは・・・を汚した。私は彼等を清めた」と言っている。我々も信仰生活の中に、いつか忍びよるルーズ、また汚れから、常に清められねばならない。